大学から車で10分足らずの崎浜漁港は、研究室のメンバーにとってまるで庭先のようなもの

気仙新聞

第４号

発　行
岩手県大船渡地方振興局
〒022-8502
岩手県大船渡市猪川町字前田6-1
TEL.0192-27-9911
FAX.0192-27-1395
http://www.pref.iwate.jp/

※気仙新聞第4号は「水と命」をテーマにお届けします。親潮と黒潮がせめぎ合いながら、多くの命を育み続ける三陸の海。遙か縄文の彼方から、この海と、リアスの大地と、そしてここに住む人々は、まるで一つの命のように生き続けてきました。そしてその営みは今も営々と続けられています。本紙が読者の皆様の「心の原風景」との出会い、そして『第二のふるさと』探しのお役に立てば幸いです。

キャンパスは三陸の海

風土にとけ込み学び合って四十年　北里大学海洋生命科学部

世界三大漁場といわれる三陸海岸のど真ん中、大船渡市三陸町にある北里大学海洋生命科学部。ここで学生達は、三陸の海をフィールドに専門的知識や技術を学んでいます。北里大学の存在は漁業発展の礎として地元に寄与しているのはもちろんのこと、風土にとけ込む学生達にとってもこの地はかけがえのない生活体験の場になっています。

三陸キャンパスの学生達

JR大船渡線の盛（さかり）駅から北東に車で三十分。三陸町の小壁（こかべ）漁場を眼下に望む越喜来（おきらい）半島に北里大学海洋生命科学部（元水産学部）の三陸キャンパスは建っています。

暖流と寒流がせめぎ合うこの海では豊富な魚類に恵まれ、定置網漁やウニ・アワビ漁などが盛んに行われ、海洋生命の研究にとってまさに理想的な環境。この広大な自然のキャンバスをフィールドに、海洋生物の生命現象の解明を進めるとともに、環境を守りながら生物資源を利用する方法を研究し、海のスペシャリストを育成しています。

近くの崎浜漁港で生態系の調査をするのは「海洋基礎生産学研究室」の加戸隆介教授と学生達。異なる条件でプレートを岸壁に沈め、張り付く生物を観察することで湾の中の生態系を調査しています。

この研究は崎浜漁港で捕れるウニと海藻の理想的な生態系を調べるのにも役に立っているとのことです。

調査をする加戸教授と学生達

三陸町の小壁漁場を見下ろす三陸キャンパス

地域と繋がる活動の数々

現在、三陸キャンパスへ通う学生達は五六〇名余り。その中にはボランティアやアルバイトを通して、積極的に地域と関わりを持つ学生が多数います。

たとえば、地元の小学生を集めての「子供塾」。これは有志の学生たちが主体的に行っているもので、海の環境や魚について自分の経験を交えながら、子供達に伝えています。

漁師さんの元で「一石二鳥」のアルバイトをする学生もいます。大分県出身で四年生の戸篠祥くんは、繁忙期の浜でホタテの養殖作業やワカメの塩蔵加工の手伝いをしています。学生達にとって、浜での実体験は大学の授業にもとても役に立つそうです。一方、若い労働力の少ない地域の漁師さんにとっても学生たちは「頼りがいのある存在」になっています。

未来の「スペシャリスト」たち

多方面で与え合う影響力

学生たちを積極的にフィールドへ連れ出し、実体験を通した学びを勧める同大学の朝日田准教授によると、「単に本を読むだけでなく、自らの手足を動かし体験することこそ『覚える』一番の近道。そういった点で三陸キャンパスは、素晴らしい教育資源に恵まれた場所といえます」と語ります。

このように多方面において、親密な関係となっている北里大学と気仙地域ですが、この六月には大船渡市と同大学の間で、人材育成やまちづくりなどの分野において連携協力する協定を結びました。

二十一世紀の日本の海洋資源や食料問題を考えるとき、三陸の海と北里大学の果たす役割は今後ますます大きくなるに違いありません。

「こんな処に住みたい！」から、いつしか四十年

獣医師・魚病コンサルタント　厚田静男さん

気仙での生活を満喫する厚田さん夫妻

厚田静男さんは東京都出身で北里大学畜産学部獣医学科の一回生。友人の住む大船渡市三陸町を訪れたときの海の美しさに感動し、「こんな処に住みたい！」と移住を決意。新設された北里大学水産学部講師としてこの地の人となり夢を叶えました。

東京都出身の奥さんとは、大船渡に遊びに来ていたときに知り合い結婚、この地で三人の子どもを育て上げました。ヨットやカヤック、パラグライダーにスキー。そして郷土芸能の剣舞（けんばい）。家族で三陸の風土と多彩な人間関係を目一杯楽しみ、気がつくといつしか四十年。

今は子育ても終わり、これまで育んできた沢山の友人たちとの交流を楽しむ毎日です。愛妻悦子さんが主催する手づくり手芸品のお店も友だちの手助けを得て建てたのだとか。お店の名前は「オープン　テラス」。この地に住む夫妻の気持ちが店の名前にしっかり出ています。

ふるさとの清流「気仙川（けせんがわ）」

気仙の人々にもっとも親しまれている川の一つに気仙川があります。美しく澄んだ清流と、その周辺に広がる田畑や草木が織り成す風景は、見る人の心をいつも和ませてくれます。みんなに愛され守られている気仙川は、住む人の思いが流れる川でもあります。

街の中を静かに流れる気仙川

海の環境を守る「魚つき林」

論説　水が命を紡ぐ

ホタテ養殖業　畠山重篤（はたけやま しげあつ）

平成六年「森は海の恋人運動」に拠り朝日森林文化賞を受賞した。その時記念品として授与された盾に、「霧の中の少女」と名付けられたレリーフが嵌め込まれていた。刻印は舟越保武。この出合がその後思わぬ展開へ…。

しばらくして新聞に舟越さんの記事が載り、盛岡出身、カトリック教徒、代表作は長崎西坂に建つ「日本二十六聖人像」であることを知る。九州に出かけた折り、長崎まで足を延ばし聖人像を拝することができた。聖人像の側に資料館がある。二階のガラスケースの中に「巡礼のザビエル」と題した木像が陳列してあった。着衣の襟の飾りに注目して驚いた。ホタテなのである。ザビエルとホタテの組み合わせはどう考えても納得がいかない。

岩手県のホタテ養殖は大船渡湾赤崎の千葉繁氏が嚆矢（こうし）であるが、じつは宮城県では私が先頭を切った。はるか、四十六年前十九才の時である。だから私にとってホタテは分身のようなものである。

ザビエルとホタテの関係の疑問は、司馬遼太郎の『街道をゆく 南蛮のみち』との出合いで糸口が見えた。司馬さんは新聞記者時代、ザビエル四百年祭と遭遇。京都カトリック教会で取材を続けていく内に、ザビエルの人となりに惹かれてゆく。いつか生誕地のフランス・スペイン国境、ピレネー山中を訪れてみたいと願っていた。やがて『街道をゆくシリーズ』がベストセラーに。イベリア半島西部の大西洋岸にカトリックの三大聖地サンチャゴ・デ・コンポステーラがあり、中世からピレネー山脈を越え巡礼の道が通っていた。正に街道である。巡礼道の近くにザビエルの生家があり、ご自身も聖地巡礼を果たしていたことだろう。

「宿のドアに、ホタテ貝のしるしが陽刻されているのを見た」と〝南蛮のみち〟に記している。ホタテはサンチャゴ巡礼のしるしであるとの説明で終わっているのだ。

だが、なぜホタテなのかには踏み込んでいない。これはオレの出番だと思った。聖地沿岸はリアス式海岸の名称の発祥地であることを知っていたからだ。リアスとはスペイン語で「潮入り川」を意味し、森川海が一つとなった所。すなわち「森は海の恋人」の世界なのである。矢も盾もたまらず二人の息子を連れてスペイン西部へ。その地ガリシア地方は雨が多く、背景にはロブレ（ナラ）と呼ばれる落葉広葉樹の大森林が広がっていた。ガリシアの海で採れないものはないとさえ言われ、もちろんホタテの産地であった。

リアスの語源はリオ（川）であることも知った。ギザギザの海岸はもともと川が削った谷であり、海は後で侵入してきたのである。川が運ぶ森の養分がプランクトンを増やしそれを食べてホタテが育つ。

水が命を紡いでいるのだ。

畠山重篤　1943年中国上海生まれ。「牡蠣の森を慕う会」代表。京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授。牡蠣・帆立の養殖のかたわら「森は海の恋人」を合言葉に、気仙沼湾に注ぐ大川上流の室根村に植樹運動を続けている。著書は『日本〈汽水〉紀行』（文藝春秋／日本エッセイスト・クラブ賞）など多数。近著『鉄が地球の温暖化を防ぐ』（文藝春秋）は北海道洞爺湖サミットの席上各国の参加者に配られた。

暮らしのそばを流れる川

住田町の街中を流れて陸前高田市の広田湾へと注ぎ込む気仙川は、全長四十四キロメートルの比較的小さな川です。

この気仙川は、気仙の人からもっとも愛されている「ふるさとの川」です。特に住田町では、主要道路である国道三四〇号線と平行するように流れていることから、川の周りには人家や田畑が多く点在し、生活に密着した存在となっています。

住田町に住む子供達が、生まれて初めて「水遊び」を経験するのはもちろんこの気仙川。真夏でも渓流に足を入れると川の水は驚くほど冷たいこと、水の中にはヤマメやイワナなどたくさんの生き物が住んでいること、小石を川面に滑らせると踊るように飛び跳ねることなど、みんな気仙川から教わります。

また、川のそばに田畑を持つ大人達は、農作業の合間に水流を眺めたり、せせらぎに耳を澄ませながら束の間の休息をとります。暮らしのそばでいつもしずかに流れている川が気仙川なのです。

美しい清流を守るために

緑豊かな北上山系の山々から、いくつもの支流が集まって流れ下る気仙川。この支流の源には、種山高原など多彩な自然の姿を見ることが出来ます。そんな自然のフィルターを通り抜けて流れ込む水は透明で美しく、見る人の心を癒します。

ところで、この恵みの清流は、決して自然の力だけで保たれてきたわけではありません。その影には、気仙川を愛する地域の人達の努力が隠れています。この川は、みんなの力によって守られてきた川なのです。

その活動のひとつが「川の大清掃」。毎年数回行っているこのボランティアには、住田町や陸前高田市に住む多くの人が参加して、河川に落ちたゴミを拾っています。また、七月のアユ釣りシーズンの前には、釣り人が心地よく利用できるようにと、住民達が川の周りに茂った草を刈り取っています。そんな活動の甲斐もあって、気仙川には毎年県内外から多くの釣り人が訪れて、清流に泳ぐアユ釣りを満喫しています。

森・川・海の深い関係

漁業を営む町では、古くから森林を大切にする習慣があります。海岸近くの「魚つき林」と呼ばれる森林は、木の影が魚をたくさん寄せるとされ、土壌の保全によって海を守るとされています。そして、後背の山に植える落葉樹の落ち葉はやがて腐葉土になり、フルボ酸という物質をつくるのだそうです。フルボ酸は鉄と結びつきやすく、フルボ酸鉄になり、フルボ酸鉄は川を通じて海に流れ込み、プランクトンの栄養源となって魚貝類の成長を助けるのだとか。

カキ・ホタテ・ワカメなどの養殖が盛んな気仙の入り江ですが、その水源となっている流域では森林資源を守る活動が地道に行われています。気仙には、行政が森林の伐採を規制している「保安林」に指定されている区域が、非常に多くあるのです。また、年に一度開催される「海と山ふれあいの森づくり」では、地域の小学生達が参加し、林業や水産関係者と共に山に登って植林し、森・川・海の関係や大切さについて学んでいます。

子どもの時の最初の冒険も、そして最初の魚釣りもこの川がくれた楽しい記憶です。みんなに愛され守られて、気仙川は清らかな住民の思いをのせて今日も滔々と流れています。

熱気溢れる「アユ釣り」解禁日

清流で知られる気仙川には、上流にイワナ・ヤマメ、下流にウナギ・ハヤなど豊富な種類の魚が泳いでおり、絶好の渓流釣りスポットとして人気となっています。特に有名なのはアユ釣り。清流に泳ぐアユは味が良く、さらに天然アユが釣れる可能性もあることから、県内外問わず多くの太公望が気仙川を訪れます。

そんな気仙川にとって、特別な日となっているのが七月一日。それまで禁漁となっていた「アユ釣り」が解禁される日です。長い冬の間、釣りたくても出来なかったアユ釣りがようやく楽しめるとあって、この日は大勢の釣り人達が気仙川に詰めかけます。解禁時間は早朝四時。遠路から来る人達は前日から河川敷に車を停めて車中泊したり、テントを張ってお酒を飲んで盛り上がったりして解禁の時間を待ちます。

この日は、地元の気仙からもたくさんの釣り人が集まり、普段は静かな清流もこの日からしばらくはお祭りのような熱気が気仙川を包みます。

明日の釣果を願って前夜祭で盛り上がる太公望達

川沿いの交流スポット「川の駅よこた」

気仙川と平行するように走る国道三四〇号線沿いには、道の駅ならぬ「川の駅よこた」というユニークなネーミングの建物があります。

これが建つのは陸前高田市の横田町。住田の街から陸前高田の街へ抜け、気仙川が注ぐ風光明媚な広田湾に至るちょうど中間の位置にあります。

ここでは地元の自然を生かした多彩なイベントが開催されています。例えば、田植え体験や昆虫採集、イカダ下りツアーなど。地元の子供達はもちろんのこと、都会から遊びに訪れた親子連れでも、気仙の大自然を気軽に満喫できるイベントがいっぱいです。

また、施設内では地元で採れた新鮮な野菜や花、地場のお菓子や加工食品などを販売。おふくろの味が楽しめる「母ちゃん食堂せせらぎ」では、気仙川名物のアユ料理の定食や手づくりおにぎりなどが喜ばれています。

気仙川の流れを楽しみながら車を走らせるときなど、途中で是非立ち寄ってみてください。

新鮮な野菜も産直価格でお買い求めできます

海の産直"三銃士"探訪

三陸発の新しい産直スタイルを切り開く若者たち

大船渡市三陸町にある「三陸とれたて市場」の青年達三人は、ウェブサイトを活用して全国に三陸の魚介類を販売しています。驚くことに、三人はみなIターンの移住者。「風土が育む命」ともいえる三陸の魚介類を販売することに、強い誇りを持つ彼ら三人の活動は地域の起爆剤にもなっています。

三陸の魚介をネットで販売

「三陸とれたて市場」は、ホタテの養殖が盛んな三陸町越喜来（おきらい）湾の近くにあります。ここから車で十分も走れば、中国から熱い支持を受ける「キッピンアワビ」の産地・吉浜（よしはま）湾や、絶品ワカメが育つ綾里（りょうり）湾がある場所です。この環境をフルに生かして、新鮮な魚介類を販売している同店。「発送専門」を看板に掲げ、ウェブサイトを利用して、全国のお客さんに三陸の海の幸を提供しています。

このサイトの特徴は、お客さんが家にいながらパソコンで、〝好きな商品を好きな分だけ〟選んで購入していくシステムです。そのため、お店の顔となるのは「ウエブサイト」そのもの。画面上でいかに商品を魅力的に伝えるかにより、売上が大きく左右されるのです。

「三陸とれたて市場」で、責任が重いウェブサイトの作成を手がけるのは、三十歳代前半の青年達。リーダー的な役割のディレクター八木健一郎さん、本格的なプログラミングを担当する松本泰博さん、食材の魅力を文章にするライターの吉田友樹さんの三人です。

三陸とれたて市場 http://www.sanrikutoretate.com/

魅力的なウェブサイト

彼らが作るウェブサイトを覗くと、数々の創意工夫に驚かされます。単なる商品紹介だけでなく、吉浜湾を生中継したライブカメラの映像公開、魚や貝類のさばき方やレシピの掲載、養殖作業の舞台裏など見所が満載なのです。さらにインターネット特有のタイムリーな情報更新もあり、サイト内は市場のような活気と浜の臨場感で溢れているのです。

地元の若者でさえ、漁業の現場を知らない人が多い中で彼らは、実際に浜の作業を手伝ったり漁師さんと会話したりしながら、食材の情報を収集しているのだそうです。

養殖作業の舞台裏を紹介するために、何度も漁師さんの元を尋ねて現場取材するというのはライター担当の吉田さん。ディレクターの八木さんは、漁師さんと連絡を密に取り合い、時には新たな漁をお願いするなどして、全国のお客さんが求める食材の要望に応えているそうです。「最初の頃は、怒られているのじゃないかと不安になりました」と話す松本さんは、三陸の漁師さん特有の低音で早口な話し方に慣れるまで相当な時間がかかったそうです。「心根の優しさがわかってしまえば平気なんですが、最初はやはり戸惑いました」と苦笑します。

そんな三人が、時には励まし合い時には大ゲンカしながらもここまでやってこられたのは、「食と命」の問題が何かと取りざたされる昨今、このリアスの風土で育まれた美味しくて安心できる魚介類を全国に送ることに喜びと誇りを持っているからだといいます。

Iターンで三陸へ移住

ところで、驚くことに三人の青年達は、みんな東海地方出身のIターン者です。元々、三陸町の北里大学水産学部に通っていたという八木さんの誘いで、吉田さんと松本さんが三陸へと移住し、現在の職業に就いた三人。自然や食や人の素朴さなど、それぞれがこの土地で出会った感動を胸に、彼らは今日も三陸の魅力を全国へと発信しています。

八木さんの仕事は漁師さんとのコミュニケーション

[お問い合せ] 三陸とれたて市場　大船渡市三陸町越喜来字前田33-1　TEL:0120-369-841　FAX:0192-44-3484　info@sanrikutoretate.com

通好みの珍味 ホヤ

三陸の夏の海の幸はホタテやカツオなどたくさんありますが、なかでも珍しいのが「ホヤ」です。その形から「海のパイナップル」ともいわれ、独特の風味に最初は違和感を感じる人も多いようです。

しかし三陸に住むものにとっては待ちこがれる初夏の味覚。スライスしたきゅうりと和えて酢の物にして食べると、三陸の夏を実感します。

あまり食べたことのないという方は、まず酒の肴として食べてみるのがお勧めです。酒量が増えること間違いなし。またお隣の国の韓国ではキムチにして食べるとのことで、最近では気仙からの輸出量も随分増えているようです。

通信販売でも買うことができますので、一度挑戦してみてはいかがですか…。この風味、舌に慣れると病みつきになること間違いなしです。

三陸を代表する珍味ホヤ

おらほの「ケセン語」③

～（す＋し）÷2＝ず～

気仙では「す」と「し」はどちらも区別なく同じ発音になります。その音はちょうど中間音に聞こえますので、地元のケセン語の先生・山浦玄嗣さんは「ず」という文字を発明しました。「ウーン　なるほど！」　字面が両方の合いの子なので、直感的に理解できますね。

同じように「ち」と「つ」の中間音は「ら」で表します。つまり気仙の人が「岩手県知事が岩手県地図を見た」というと、「岩手県知事（らず）が岩手県地図（らず）を見た」となります。

ちなみにカタカナの場合、「ス」と「シ」の中間音を「ㄨ」、「チ」と「ツ」の中間音を「ㄨ」と表します。

気仙に移住を考えている方は事前にこの発音を練習しておくといいかもしれませんね。（笑）

ケセン語の表記では「す」と「し」は同じ発音なので「ず」と表し、「ち」と「つ」は同じ発音なので「ら」と表します。

リアスの歳時記

文●金野静一
絵●庄司暁子

海と信仰

～舟下ろしと船霊信仰～

海を背景に生活している漁民には、陸地とは異なる独自の信仰がある。

一般的に漁船には「金比羅大権現」を祀る風が多いが、新造船のときなどは「お船霊さま」を祀るのが普通である。

お船霊さまは、女の神様だとする信仰が強い。そのため、一般的には、女性が漁船などに乗船するのは禁止されていた。

「舟おろし」の作法としては、お船霊さまにお神酒を供え、神職に祝詞をあげてもらい、その後、舟を漕いで岬や浦を回ってくる。その場合、浦浜によって左回り、または右回りをし、一定の方向に三度にわたって漕ぎ回る。龍神や弁天、あるいは「エビスさま」がおられるという岬や半島にまで出かけ、お神酒を捧げる。帰ってくると、その新造船の船頭になる人を、みなで海に投げ込んだり、水を浴びせたりする風習もあった。

ところで、三陸町越喜来（おきらい）では「舟下ろし」の祝宴のとき、次のことが行われていた。

―その日に舟主の宅に関係者が集まって祝宴を張る。床の間には「山ノ神」のお掛図が、一同が見えるように掛けてある。

舟主は、祝宴の手伝いをしている若い女性の中から一、二名を特に指名しておく。宴がたけなわになった頃、舟大工が座敷中に餅をまいて歩く。このまかれた餅は、舟主から指名された女性が、ていねいに拾って歩く。拾った餅は、床の間の「山ノ神」のお掛図に供えられ、この女性に合わせて一同が礼拝する―

舟大工は、海や舟の守護神としてのお船霊さまのほかに、右の例のように「山ノ神」を信仰するふうも根強かった。舟大工は、家大工ともども、毎月の十二日（山ノ神の日）には、山へ登ったり、木を切ったりすることは固く戒められていた。新造船の進水にあたっても、その加護を受けている「山ノ神」を大事に祀るのである…。

気仙とともに［No.04］

気仙への思いをお菓子に託して！

齋藤 俊明 さん
さいとう製菓㈱代表取締役社長

気仙や大船渡の地名は知らないけれど、「かもめの玉子」を知っているという人は多いのではないでしょうか。それほどまでに、全国的に有名な銘菓を育んできたのはさいとう製菓㈱社長の齋藤俊明さん。湧き上がる地域への愛を、お菓子とまちづくりに懸ける情熱の人です。

「岩手の環境」を個性に

ほくほくとして優しい甘さの黄味餡をホワイトチョコで包んだ「かもめの玉子」は、あまりにも有名な銘菓です。この銘菓を生んだ「さいとう製菓株式会社」は、郷土を生かしたお菓子作りにこだわり続けている会社です。

「大自然がある岩手。水と空気と勤勉さに恵まれ、農産物も素晴らしい。この素材を活かしたお菓子作りこそ、われわれの個性に繋がると思います」と郷土に敬意をはらうのは社長の齋藤俊明さん。そして、その言葉通りに同社は「岩手を食べよう」をキャッチフレーズとした県産食材使用の洋菓子部門「ル・ポミエ」や、郷土の歴史や文化をテーマとした和菓子の「七郷の風土菓」シリーズなどを展開しています。

地域のリーダー的な存在

「郷土に対する思い」は、お菓子作り以外でも大いに発揮されています。観光物産協会会長や商工会議所副会頭を務めるなど、齋藤さんは地域のリーダーとしても欠かせない存在なのです。

また、毎年恒例となっている大船渡夏まつりでは、実行委員長であると共に「海を愛する会会長」としても活躍しています。この会は、祭りの立役者である「海上七夕」を主催するグループ。夜の海をまばゆい光の装飾で彩る船団「海上七夕」は、今や気仙の風物詩として定着していますが、この企画者が齋藤さんなのです。

「大船渡湾を生かした夏祭りで、もっと地元を盛り上げたいと考えました。色々と悩んだ末、海の上に七夕飾りを浮かべたら綺麗だろうと思ったのです」。この斬新な発想は功を奏し、それまで年々寂しくなり始めていた夏祭りが、「海上七夕」をきっかけに、元のような活気を取り戻し始めたのです。

愛する故郷に願うこと

「以前、客船の『飛鳥』に乗ったことがありました。湾に入ってくる時の高い甲板から見渡した大船渡の風景が今でも忘れられません。『わぁ！ これがわが故郷かぁ！ この町はこんなに素晴らしい姿をしていたのか！』と涙が出るくらい感動しました」。この時、大船渡に生まれて本当に良かったと齋藤さんは強く思ったそうです。

飾らない言葉で、郷土への熱い思いを伝えて下さった齋藤さん。常にまっすぐに感動する心こそ「お菓子」や「祭り」に熱い息吹を注ぎ込む源なのだと感じさせられます。今後の願いは、風土を最高に生かすまちづくりと、若者が夢と希望を持てる地域づくりだと言います。「いつも、ふるさとに誇りを持っていたい」という齋藤さんの思いが、気仙にパワーを注ぎ込んでいます。

東北を代表する銘菓「かもめの玉子」

気仙がテーマの「七郷の風土菓」

夏祭りの立役者「海上七夕」

多彩な祭りを気仙で楽しむ。

三陸の海とともに暮らす気仙人のお祭りは、秋よりも夏が一段と盛り上がります。「知って、行って、見て、会って」。祭りでしか感じることができない気仙の心がここにはあります。

気仙は夏になると〝味覚のお祭り〟や〝伝統のお祭り〟などと多種多様なお祭りが続きます。

七月中旬には〝味覚のお祭り〟の代表として、大船渡市の「長崎海岸ウニ・アワビまつり」が開催されます。岩手県内はもとより、県外各地から水揚げ直後の新鮮な魚介類を求めて、会場への道路は延々と長い車の列が続きます。お目当ての食材はやはり新鮮なウニやアワビ。普段、魚屋さんで買って食べるのにはちょっと勇気のいるウニやアワビですが、安くて美味しいここならばと思い切り食べている内陸の人の姿も見られます。

次に〝見て楽しむお祭り〟として、七月下旬から八月上旬にかけて花火大会が各地で行われます。大船渡市の「夏まつり」の花火大会は打ち上げ数や規模ともに気仙を代表する花火大会として毎年大勢の見物客でにぎわいます。また、旧盆の十四日に陸前高田市で行われる「高田松原花火大会」は白砂青松の砂浜に寝ころんで、潮騒を聞きながら目の前で打ち上げられる花火を楽しむことができるため、年ごとに大きな人気を博しています。

江戸時代、伊達藩の火縄をつくっていたとされる住田町の「夏まつり」では江戸時代を彷彿させる甲冑を身につけた武士による火縄銃の実演がなされ発射音が響き渡ります。

〝参加するお祭り〟の筆頭は陸前高田市で八月七日に行われる高田町の「うごく七夕」と気仙町「けんか七夕」が有名。華麗に装飾された十四台の山車が町内を引きあう「うごく七夕」。勇壮な太鼓のもとで山車と山車をぶつけあう「けんか七夕」ともに、引き手はだれでも参加できるのでこの時期気仙を訪れたなら、思い切って参加してみてはいかがでしょうか。きっと、祭りでしか感じることができない気仙の心を感じることができるはずです。

山車と山車をぶつけあう勇壮な「けんか七夕」

浜辺でゆったりと見られる「高田松原花火大会」

勇壮な「五葉山火縄銃鉄砲隊」

おいしさいっぱい「長崎海岸ウニ・アワビまつり」

ぶらり三陸旅 3

～八木健一郎の産直こぼれ話～

［サンマ雑学・刺身の旬と干物の旬］

サンマ漁が始まる初秋。港にはサンマ船が大挙をなし、浜全体が活気づく。

このサンマ、一風変わった水揚げ動向がある事は、意外と知られていない。

初秋には、脂がのった刺身向きの大型サイズが大量に水揚げされるが、晩秋には、脂が抜けて干物に向く小型サイズが大半を占めるようになるのだ。

贈り物には、魚体が大きい9月がおすすめ。お刺身を堪能したら、今度は小型魚で干物作りに挑戦してみては？

脂がのった三陸の鮮サンマ

（このシリーズでは、「三陸とれたて市場」八木健一郎さんが、三陸の潮風の香りのするミニ・エッセーをおとどけします）

Topics ムック本『奇跡の海三陸』

～三陸の風土がこの一冊に～

「食と命」が話題になることの多い昨今ですが、山と川と海が育む命の循環を多くの人に知ってもらい、「三陸の生きた風土」を感じてもらいたいと制作されたのがこの本です。

巻頭寄稿に『バカの壁』の養老孟司先生、特別現地対談では、北里大学の陽捷行副学長と東京「分とく山」の野崎洋光料理長、そして北里大学の朝日田卓準教授が「奇跡の海三陸」の秘密を科学的に解き明かしているほか、丸一年をかけて撮影した二百点近くの写真が好評です。

（A4版八〇頁／全頁カラー／税込価格一、〇〇〇円）

左記でお買い求めになれます

イー・ピックス出版 http://www.epix.co.jp

アマゾン http://www.amazon.co.jp/

［編集後記］

◆今回で気仙新聞も第４号の発行を迎えることができました。

◆今回のテーマは「水と命」です。「水」は人にとってなくてはならないものです。川のせせらぎ、波の音、聞いているだけで癒され、仕事の疲れも消えてしまいます。その反面、この地域は、津波、河川の氾濫など自然の驚異にもさらされてきました。水のいろいろな面と向き合いながら「命」を育んできました。

◆地域の豊かな自然を守りつつ、それを「生命」の糧として次の世代に引き継いでいく。紙面では、水産業の希望を担う北里大学の学生達とそれを取り巻く住民の人たち、川で遊ぶ子供達、インターネットというツールを利用して地域の情報を発信する若者達。「水」とふれあいながら、若い世代が地域を活性化しています。

◆限界集落の増加、人口の減少などめまぐるしい社会環境の変化の中でも、川の流れ、海の波のように少しずつでも止まらず確実に・・そんな地域の流れを刻んでいくことがこの地域の未来を託された我々の使命ではないでしょうか。

R100 本紙は古紙配給率100%再生紙を使用しています

［気仙新聞 第4号　発行:平成20年8月29日］

岩手県気仙地方への移住・定住などのご相談は下記の窓口までお問い合せください。

●大船渡地方振興局・企画総務部（「気仙新聞」係）
電話 0192-27-9911

●岩手県の総合窓口「定住・交流サポートセンター」
（岩手県地域振興部地域振興支援室）
電話 019-629-5194（直通） http://www.pref.iwate.jp/~uji_turn/

●首都圏での総合窓口「いわて定住・交流支援センター」
（いわて銀河プラザ Uターンセンター内）
電話 03-3524-8282　http://www.pref.iwate.jp/~hp0401/

●大船渡市の窓口 「企画政策部企画調整課」
電話 0192-27-3111　http://www.city.ofunato.iwate.jp/

●陸前高田市の窓口 「企画部企画政策課」
電話 0192-54-2111　http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/

●住田町の窓口「町づくり推進課 移住相談窓口」
電話 0192-46-2114（直通） http://www.town.sumita.iwate.jp/

ちょこっとプレゼント

読者の皆様から気仙新聞への感想やご意見を募集しています。ハガキまたは封書に「ちょこっとプレゼント応募券」を貼ってお寄せください。お寄せ頂いた方の中から抽選で5名様に、さいとう製菓の【七郷の風土菓】詰め合わせをプレゼントさせて頂きます。

（第4号の〆切は2008年11月30日です）

［応募先］

〒022-8502
岩手県大船渡市猪川町字前田6-1
岩手県大船渡地方振興局
「気仙新聞」係

ちょこっとプレゼント 応募券 ［気仙新聞4号］